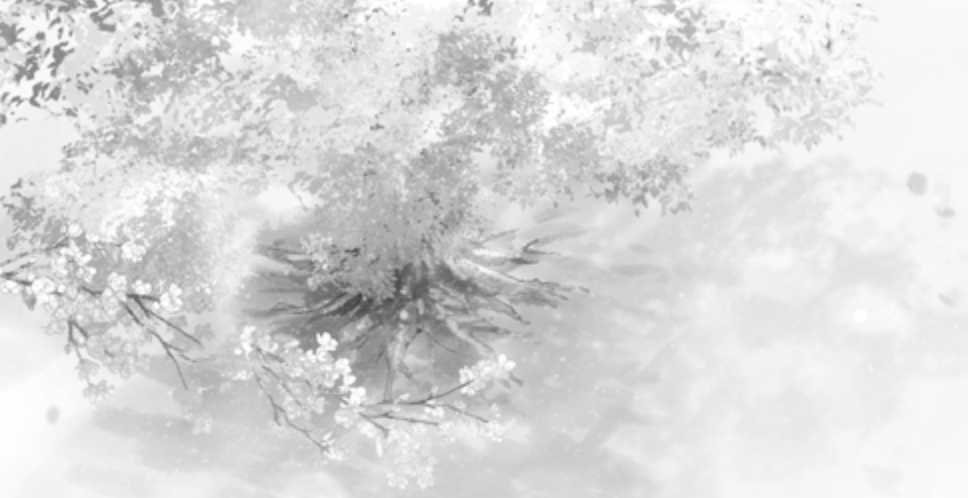




ぼくたちのための レシピノート

bokutachi no tameno Recipe note.

Morizono Kotori
森園ことり



ALPHA POLIS

アルファポリス

1 桜茶 キャラメル

ぼく、今川^{いまがわひろむ}広夢は図書館でアルバイトを始めて一年たつけれど、いまだに満足のいくような仕事をする事ができないし、周囲の人間とうまく接することもできていない。

利用者に話しかけられても必要最低限の言葉しか返せない。
貸出処理のスピードも、丁寧^{ていねい}にやり過ぎてしまうせいで、遅いとよく注意される。

「東洋医術の本ある？」

まったく知らない本の場所を訊^きかれると、落ち着いて貸出機で検索すればいいのに、決まって焦^{あせ}ってしまい、やたら時間がかかってしまう。

その挙げ句、なぜか見つけることができず、

「ここにはないようです」

と相手に死の宣告を受けたようながっかりした顔をさせてしまう。

正規の図書館職員は事務室で事務作業をするのが主で、カウンターに出ることはほとんどない。そのため、利用者と接することもほぼない。

本来ならばそういう事務作業のほうに向いている。大勢の人間と話さないですむから。

でもアルバイトのぼくはカウンター業務と配架^{はいか}が仕事だから、利用者である色々な人間に対応

し、会話をしなければいけない。これがどうしても苦痛でならない。

声が小さいことで何度も聞き返されたり、ミスをして上手に謝罪できないので舌打ちや叱咤しったされたりすることも少なくない。

また、大きな図書館だけに同僚がやけに多いので、人付き合いが苦手なぼくには極めて厳しい。同僚が少なくても厳しいことに変わりはないだろうが、人数が多ければ多いほど、一人でいることが目立ってしまう。

図書館で働こうと思ったのは、静かにカウンターの椅子いすに座って、利用者が来るまで本を読んで過ごす……なんてイメージを勝手に抱いていたからだ。

実際は、接客業みたいなもので、最もぼくに向かない。

それでも辞めずに一年も続けているのは、どんな仕事でも人と接しなければいけないということ、こんなぼくでも理解しているからだ。

だったら新しい環境で見知らぬ人たちとまた一から関係を築くよりは、ここで我慢したほうがマシだ。

ここならもう周囲の人たちは、ぼくの非社交的な性格を把握はあくしているから放っておいてくれる。当然、働き始めて一年もたつのに、同僚たちとのほとんどと壁があった。

「とてつもなく高い壁がありますよね」

まだかさんにもそう言われたことがある。

山田やまだまどかはぼくより一つ年下の十九歳の大学生で、ぼくより半年あとから働き始めたのだけ

れど、ぼくよりずっと仕事ができるし、職場になじんでいる。

「わたし、年下ですし、後輩なんですから、敬語やめてくださいよ」

そう言われるのだけれど、敬語はどうしてもやめられない。

敬語を使わずに喋る相手は家族以外にいない。

本当は同僚を下の名前で呼ぶことにも抵抗がある。しかし職場には他にも山田さんがいるので、まどかさんのことは下の名前で呼ぶしかない。

そんなことを考えながら配架を続けていると、金髪の女性が、剃り込みそりこみを入れた大男にもたれかかりながら訊ねてきた。

「あのー、カクテルの本でどこにありますか？」

「三番と書かれている通路の書棚にあります」

「あ？」

大男が苛立いらだったような声をあげる。

「さ……三番の」

隣の女性がぐすくす笑いながら、男の腕を引っ張った。

「あっちみたい。いこ」

「ちっせー声だな」

吐き捨てるように大男が言った。

彼の言う通り、ぼくの声は本当にとっても小さい。大きい声がどうしても出せない。

「ちゃんと食べてないから、腹の底から声が出ないのよ」
 なんてことを、ある中年女性の同僚に言われたことがある。
 でもぼくが太ったとしても声は大きくはならないだろう。

「ぼく、今川さんの隣の部屋に住んでるんです」
 図書館スタッフ用の休憩室で休んでいる時、ぼくの隣に座る星野響が、突然そんなことを言い出した。

ぼくの吹き出したお茶がまどかさんの持っていたクッキーを直撃して、彼女は悲鳴をあげる。
 「ぎゃ。何してくれてんですか」

顔をしかめた彼女は新しいクッキーに手を伸ばしながら、星野響とぼくを交互に見た。

「でもそれってすごい偶然ですね。今川さん、知ってました？」

「いえ」

ぼくはそう答えながら、ティッシュペーパーで汚れたテーブルを拭く。

「挨拶に何度か訪ねたんですが、いつもお留守みたいで」

そういえば半月ほど前、毎日のようにしつこくドアをノックする者がいた。セールスだろうと出なかったのだが、そうしたら、ある日ドアのノブのところに紙袋がかかっていた。

タオルの入った箱と、

『隣に引越してきました。よろしくお願いします。星野』

と書かれたメモ用紙も入っていた。

隣の部屋に引越してきた『星野』が、隣に座っている星野響だと言われてもぴんとこない。
 しかし、変な汗がふき出してきた。

「住んでるアパートが同じ、職場も同じ、同じ大学生で、同い年」

まどかさんは指を折りながらぼくたちを見た。

「あとは何が同じ？」

休憩時間が終わって仕事に戻っても、変な汗が止まらなかった。それでも何とか配架をしていると、時折、カウンターにいる星野響が視界に入ってきた。

彼はこの図書館で働き始めてからまだ数日だけれど、既にスムーズに仕事をこなしている。
 ここはかなり大きな中央図書館で、利用者も他の図書館に比べて格段に多い。

総合カウンター、児童室カウンター、視聴覚カウンターと三つのカウンターがあって、色々な種類の書籍を扱う総合カウンターが一番大きいフロアにあるので特に忙しい。

カウンターは長く、五人のスタッフが貸出処理をすることができるけれど、それでも毎日のように、貸出を待つずらりと長い行列ができる。

だから総合カウンターはぼくたちにとって戦場のようなもので、とにかくスピードと正確さが求められる。

貸出処理だけならいいが、新規の利用者登録を希望する人や、本を汚したりなくしたりして弁償手続きをする人もいる。

それだけでなく、求めている情報や本を探し出す手助けをしてくれる、レファレンス担当のカウンターへ行かず、普通のカウンターで、

「この古い漢字の読み方を調べたいんだけど、どこにそういう本ありますか？」などと突然訊ねてくる人だっている。

とにかくやる仕事、覚えることが多いのだ。

だからこの図書館のマニュアルはぞつとするほど分厚い。

一週間の研修期間中は見習いとして、『研修中』と書かれた札を胸につける。

研修中にカウンターに立つ時は、いつでもフォローできるようにベテランスタッフがすぐそばについてくれて、困った時には手取り足取り教えてくれる。

しかしその一週間が終わると問答無用で独り立ちさせられてしまう。

たった一週間で独り立ちできる自信がなくて、研修中に辞めていく人もいる。

それなのに、星野響は二日ほど一通りの仕事を覚えてしまい、フォローのスタッフが出る幕は既らない。

だから、少し暇になると、彼はフォロースタッフのベテランパート主婦さんと雑談をこまます、なんていう芸当までしてのけている。

そんな彼は利用者に対しても、余裕を持った対応ができる。

たとえば、「コピーがうまくとれない」と年配の男性が助けを求めてくれば、すぐにフォロースタッフにカウンター仕事をまかせて、利用者と一緒にコピー機まで行ってコピーをとってあ

げる。

児童室では、小学校低学年ぐらいの子供がもじもじしながらカウンターにやってくると、「さがしてる本がみつからないの？」などと子供の目線まで腰をおとして、優しい笑顔で話しかける。自分から声をかけるなど、ぼくには到底できない芸当だ。

彼はイベントポスターの飾りつけ用の折り紙を取り出して、ささっと器用に風船を折ってあげて、そんな恥ずかしがり屋な子供にあげたりもする。

その子は後日、星野響がカウンターにいる時にやって来ると、お礼のつもりなのだろうか、キャンディーを一個、星野響に差し出した。

利用者から、しかも子供から、そんな素敵なプレゼントをもらったスタッフはそういないだろう。

また、スーツ姿で五冊ほどの単行本を借りに来た男性サラリーマンには、彼が手ぶらだと見てとるやいなやすぐに、

「よかったらお使いください」

と、ストックしてある紙の手提げ袋を、カウンター下の箱から取り出して男性に差し出した。

「お、ありがとう。気が利くなあ」

そのサラリーマンは、彼の心遣いと機転のよさに、えらく感激していた。

研修中にここまでやってのけた人間を、星野響以外にはくは知らない。

前にも何かしらのアルバイトをしていたんだろうが、彼はどこでもやっていけるような人間だ。

それも、誰よりもうまく。

何よりもそのコミュニケーション能力の高さにはひれ伏すしかない。ぼくが図書館にいる間で最も苦手な休憩時間でも、彼はその能力を発揮した。休憩時間は十分間と短いのだが、その間にささっと食事前のパンやおにぎりをかきこんだり、お菓子やお茶で仕事の疲れを取ったりする。

同じ休憩時間になった人たちとテーブルで向かいあうのがぼくにはとても苦痛だ。

みんなでわいわい楽しそうに会話している中に入れないし、入りたいとも思わない。もっと休憩時間が長ければ、外のコーヒーチェーン店に逃げ込みたいところだ。

だから休憩時間はいつも、丸まったダンゴ虫みたいに気配を消して食事をとるか、本を読むかしている。

でも、初めて星野響と休憩時間が一緒になった時、彼は誰よりも先にぼくに話しかけてきた。

「何読んでるんですか？」

ぼくはその時、有名な文学賞の候補になった作品群の一冊を読んでいた。図書館に勤める者として、というよりも、単純に興味があるからだ。いつもその賞の候補作は読むようにしているの

で、そのことを伝えた。

「すごい。ぼくも今度から読むようにしようかな」

ぼくの言葉に驚きながら彼がそう言うと、他の女性スタッフがニヤツとしながら声をかけてきた。

「わたしもそれ読んだよ。ラスト、すごいよ」

「ちょっと、ネタバレはだめですよ。ねえ？」

彼はぼくにそう同意を求めて、眉間に爽やかな皺を寄せた。

「ごめんごめん。でも面白いから、それ。おすすすめ。受賞するといいいねえ」

女性スタッフが笑顔でぼくに向かって言ったので、ぼくは挙動不審になりながら、なんとか頷いた。

ぼくがここで働き始めて一年、その女性スタッフがそんな笑顔で話しかけてくれたのは、その時が初めてだった。

それに比べて、働き始めてわずか数日の星野響は簡単にぼくを同僚との会話に引き込み、ぼくへの笑顔さえ引き出した。

ぼくの一年と、彼の数日は等価なのだと思うと、めまいがした。

それから、星野響はぼくと休憩時間が一緒になると、ぼくがどんなに『話しかけるなオーラ』を出していても、それを飄々とぶち破って、みんなの会話にぼくを引きずりこもうとする。それも、ごく自然に。

彼の『天性の無邪気さ』に、ぼくの『話しかけるなオーラ』は勝てない。でもぼくは思う。

星野響は確かに無邪気だけど、それを意識的に利用している。

ぼくが職場で孤立していることを一瞬で察知して、意識的にぼくを会話に引き込み、円滑なコ

コミュニケーションをとらせようとしている。

なぜ彼がそんなことをするのか、ぼくにはわからない。

単にお節介な性分なのか、あるいは自分のコミュニケーション能力の高さを、ぼくを使って周囲に見せつけたいのかもしれない。

仮に前者なのであれば大きなお世話だし、後者であれば性質が悪い。

ぼくは星野響のことを、苦手な人間に分類した。

ある日、仕事を終えたぼくは、図書館の裏にある自動販売機でカルピスウォーターを買った。喉が渴いていたので無心で飲んでみると、突然、暗闇から呼びかけられた。

ひどく驚いたぼくはペットボトルを落としてしまった。

それを拾いあげたのは、星野響だった。

「驚かせてすみません」

彼は黄色い自転車をひいていた。

「こっちに來るのが見えたんで」

桜の花びらがどこからか舞い落ちてきて、ぼくにペットボトルを手渡す彼の紫色のキャップの上に着いた。

「よかったら一緒に帰りませんか？」

ぼくは持っているペットボトルを軽くあげて、首を横に振った。

「これ飲んでから帰ります」

「待ちます」

すかさず言葉を返してきた星野響。

ぼくが何も言えず黙っていると、彼は自転車にまたがった。

「すみません、邪魔をしてしまつて。じゃあ、おつかれさまでした」

闇の中に消えていく黄色い自転車をじっと見つめていたぼくは、気が滅入ってきた。もし彼が、純粋な親切心でぼくによくしてくれているのだとしたら。

でも、ぼくにはどうしたらいいかわからない。

自転車を押して、とほとほと近くの公園に行った。

夜の公園は不気味だ。ブランコが勝手に動き出しそうに思える。でもここに来ると、なぜかほっとする。

この小さな公園は街のエアポケット的な存在で、夜になると誰も来ない。カップルさえも来ない。銀杏の緑の葉だけが、街の建物を撫でてきた風に揺れている。

空を見上げると半月が輝いていた。星はほとんどない。

月を見ているとさびしくなるのはなぜだろう。

完璧過ぎるほど綺麗だからだろうか。冷たい光を放っているからだろうか。お互い一人ぼっちだからだろうか。

アパートに帰って駐輪場に自転車をとめると、星野響の自転車が目に入った。彼の黄色い自転

車はひとときわ輝いて見える。どうやら新品のようだ。引越し祝いに誰かからもらったのかもしれない。

ぼくの部屋は二階の角部屋で、その隣の彼の部屋の明かりはついていていた。

隣の部屋に同僚が住んでいる。

こういう偶然がそうないのはわかっていて。だから、彼は今夜、ぼくと帰ろうとしたんだろう。たぶん、仲良くなるために。

友達が欲しくないわけじゃない。

ただ、相手がどんな人間かわからないのに簡単に距離を縮めるのが怖い。相手のことをよく知りたい。ぼくと合う人間か。ぼくが好きになれる人間か。ぼくを悩ませない人間か。

ぼくの周囲には、友人関係で悩んでいる人たちが大勢いた。

突然仲間はずれにされたり、金の貸し借りで揉めたり、グループ内での恋愛トラブルがあったりなど、あげればキリがない。

単に、そもそも気が合わないのに成り行きで友達になってしまつて、付き合うのがストレスや苦痛になっているという人もいた。

そういうのを傍から見てみると、つくづく一人のほうが楽だと思った。

その一方で、たとえうわべだけの関係でも、時を共に過ごす誰かがいる人たちを羨ましく思うこともある。

一人は辛い。孤独は心も体も冷たく固くする。

カップラーメンを作つたが、食欲がなくて半分ほど食べてやめた。胃が痛んだので胃薬を飲み、シャワーを浴びてベッドに横になった。

隣の部屋は静かだった。

聞き耳をたてるなんて、よくないことだ。

だから耳栓をして、ラジオをつけっぱなしにして眠った。

女性の笑い声で目が覚めた時、ラジオの音だと思った。

でも耳栓を取って耳をすますと、ラジオからはギターの音色が流れていた。

若い女性の笑い声はどうやら壁の向こう側から聞こえてくるようだった。

そう。星野響の部屋から。

彼女か。

あるいは姉か妹、女友達という可能性もある。

いや……それはないか。

隣から聞こえてくる女性の笑い声は、肉親や友達の前であげる女性の笑い声とは違い、異性、それも好意を寄せる相手の前であげる笑い声独特の、艶と華やかさがある。

やっぱり彼女だろう。

当然だけれど、この部屋に女性が入ったことはない。母親をのぞいて。

隣から聞こえてくる女性の笑い声が耳障りに感じるのは、妬みとひがみからか。

今日の大学の授業は午後からで午前中は用事がない。まだ朝の八時だ。

ベッドから起き上がってラジオを消したぼくは、パーカーをはおって部屋から出た。なるべく隣の部屋を見ないようにしながら早足で廊下を進む。

まだ胃が痛い。

相変わらず食欲もない。

アパートから一番近いコンビニエンスストアに入ると、牛乳とカップラーメンをカゴの中に入れた。

それから雑誌コーナーに行つて、ある男性誌の表紙を眺めた。ひそかに応援している女優が微笑んでいる。ぼくはその雑誌を手にとって開いた。

その女優はぼくと同じ年で、去年ブレイクして一気に人気になった。今も連続ドラマの主演をつとめている。彼女は公園のブランコに座り、無邪気な笑顔でこちらに笑いかけていた。

『休日ですか？　ほとんどひきこもり状態ですよ（笑）。家で過ごすことが好きなんですよね。マイブームは読書です。お友達からすすめてもらった小説が面白くてはまっちゃいました。あ、おすすめの本とかがありますか？』

あるよ。

面白い本ぐらい、いくらでも教えてあげられる。

ぼくはため息をつくとき、雑誌を閉じてラックに戻した。

そしてレジカウンターに向かって歩き出した時、星野響が女性と一緒に入ってきた。

彼はすぐにぼくに気づいて、「あ、どうも」と笑った。昨日のことは全然気にしていないように見えた。

彼は隣にいる、すらりとした色白の美人に向かって、ぼくのことを紹介した。

「こちら、同僚で隣の部屋に住んでる今川さん」

「ああ」

彼女はぼくを見て、丁寧に頭を下げた。

ぼくもしかたなく頭を下げる。

星野響はベージュのチノパンに黒いドット柄のシャツ、紺色のカーディガンというこざっぱりとしたなりをしていて、隣の女性は淡い水色のワンピースに白いノーカラーのジャケットをはおっている。

ぼくはパジャマにしているスウェットパンツにTシャツ、パーカーという格好で、すべてが気持ちよくよれよれになっていた。

「はじめまして。新木あらきゆりです」

「あ……今川広夢です」

軽く頭を下げてレジに向かった。財布を取り出して代金を払う。

ビニール袋をぶらさげて出口に向かうとした時、彼らはまだ同じ場所において、ぼくのことを見つめていた。ぼくはまた軽く会釈えしやくをして彼らの横を通り過ぎた。

その時、彼の連れの女性からいい匂いがしたことを覚えている。彼女の趣味しゅみはアロマで、その

匂いがジャスミンだと知ったのはもつとあとのことだ。

その時はただ、女性というのはいびい匂いがするものだど驚き、また、そんな匂いをいつも嗅いでいられる星野響はなんて恵まれた男だろうと思った。

共通点がいくら多くても、相違点がこれじゃあ、神様も不公平すぎるというものだ。といっても、この世界が不公平にできているということはもうずっと前から知っている。そのことでなんだかんと言われても神様も困るだろう。公平とか不公平とか、幸せとか不幸せとか、そういうことはあまり考えないほうがいい。考えてもどうせ無駄だし虚しくなるだけだから。

それでもやはり、目の前に幸せそうな人たちが現れると心は揺れる。どうして自分はあるなふうになれないんだろうと、悲しくなる。

もう二人に会いたくなかったので、部屋に帰るとすぐに着替えて近所の図書館に行った。

職場の図書館よりもこじんまりとしていて蔵書も少ないけれど、そのぶん、利用者も少なくて落ち着けるところが気に入っている。

図書館は開いたばかりで、まだ空いていた。しかし、他に行き場がない人々が既に大きな荷物を床に置いて椅子に陣取っている。

まだ小さい頃、ぼくは彼らと自分は違うと思っていた。

でも今は違う。一人暮らしを始めてから考えが変わった。

病気になったり、働けなくなったりしたらどうなるだろう。ぼくにだって、誰にだって、家を失う可能性はある。だから、ぼくたちと彼らは変わらない。

そして、誰にとっても、雨風と暑さ寒さをしのげる図書館という場所は必要だ。これまでも、これから先もずっと。

大きなテーブルで本を読み始めると、しばらくして隣に座っていた男性が、「ねえ」と声をかけてきた。

「何か書くもの持っていない？」

彼は手ぶらで来たようで、荷物を持っていなかった。三十代だろうか。上下ジャージ姿だが顔立ちは整っており、人懐っこいくしゃっとした笑顔が印象的だ。

平日の午前中にこの格好で図書館にいるなんて、どんな仕事をしてるんだろう。あるいはしていないんだろうか。

ぼくはリュックサックからペンケースを取り出した。

「ボールペンでいいですか？」

「うん、いいよ」

彼はボールペンを受け取るとにつこり笑った。

「メモ用紙とかもある？」

ぼくはメモ帳を取り出して一枚破り、テーブルに置く。彼はそれを持って腰をあげた。

「ちょっと借りるね」

彼はスマートフォンを握って小走りに図書館から出ていって、十分ぐらいたってから戻ってきた。

「ありがとう」

そう礼を言ってきた彼は、軽い足取りで立ち去った。ボールペンは返ってこなかった。

その日、ぼくが言葉を交わしたのは、星野響と新木ゆりとボールペンを貸した男だけだった。大学では誰とも話さなかった。

学校で誰とも話さないのには慣れている。

中学生の頃から、ぼくには友達というものがいない。

別にいじめられていたわけではない。ただ、孤立していた。勉強もできたし、スポーツもそこそこできた。でも、人とコミュニケーションをとることが苦手だった。自分から話しかけることができないし、話しかけられても黙り込んでしまつて会話にならない。

そのうちぼくは人と向き合うことを諦めてしまつたし、周囲の人々もぼくを放っておくことにしたみたいだった。

いじめられなかったのは、ぼくが授業のノートを代償なしにみんなに貸してあげたからだろう。会話をする必要はなかった。

「今川、英語のノート見せて」

そう言われれば、黙ってノートを差し出した。

ぼくのノートは宿題をしていない男子生徒や女子生徒たちの手に渡り、彼らのノートに写された。

そういうのが、中学、高校と続いて、そして大学でも繰り返されている。

「嫌じゃないの？」

男子生徒にノートを貸したぼくに、そう訊ねた女の子が過去に一人だけいた。

中学三年生の時のクラスメイトの佐々木清香だ。

ぼくが無言で首を横に振ると、彼女は大人びた静かな表情でただじっとぼくを見つめた。そして、ポケットから何かを取り出してぼくの机の上において立ち去った。

それはキャラメルだった。

ぼくはその時だけなんだか泣きそうになって、誰かに奪われないようにすぐに手に取ってポケットにしまった。

そのキャラメルは食べることができなかった。大事に、お守りのようにいつも学生服のポケットに入れたままにしておいた。

しかし、いつの間にかなくなつてしまった。なくなったことに気づいた時はとても悲しかった。それからというもの、ぼくの好物はキャラメルになった。

今でもキャラメルをいつも、いくつかポケットにしるせている。

孤独を感じると、ぼくはポケットに手を入れて、それをぎゅっと握りしめる。

新木ゆりがぼくの部屋のドアを激しく叩いたのは、それから数日後の日曜日の午後三時過ぎだった。

「すみません！ すみません！」

めちゃくちゃに叩かれているドアの音と取り乱した女性の声に、ぼくの心臓はぎゅっと縮み上がった。

その時ぼくは、ラジオを流しながら、スパークスの『きみに読む物語』を読んでいた。「今川さん！ ゆりです！ 助けてください！」

ゆり。新木ゆり。

以前会った彼女の、清楚^{せいそ}でおとなしそうな外見からは想像がつかないほどの大声だった。助けて、という言葉に、本を放り出して、足をもつれさせながら玄関に向かった。

ドアを開けると、ピンク色のカーディガンにデニムパンツ姿の彼女が床にしゃがみこんでいた。一瞬、星野響に暴力でもふるわれて助けを求めてきたのかと思ったぼくは、隣のドアにさっと視線をやった。

「響が出てこないんです」

「……え」

「昨日の夜から電話に出ないし、今も部屋の中にいるはずなのに開けてくれないんです」状況がのみこめなかった。

星野響と昨夜から連絡がとれない……ということは、何か問題なのだろうか。こんなに取り乱すぐらいに。

彼女は立ち上がり、ぼくの手首^{つか}を掴んだ。驚くほど強い力だった。

「大家さん……の電話番号、教えてください。鍵^{かぎ}、開けてもらわないと」

「……え」

そんなこと、していいのか？

「はやく！」

彼女が声を荒らげた時、かちやりと隣のドアが開いて、星野響が顔を出した。

彼はこちらを見て、呑^の気に手を振った。

気がつくとき、新木ゆりは瞬間移動したみたいに既に彼の腕のなかにいた。

「ごめん」

星野響はそう謝った。

「大丈夫？」

彼女は胸にすがりつきながら彼を見上げている。

「寝てた」

「本当に？ 寝てただけ？」

「本当だよ」

あくびをした星野響がよろけて、彼女が支えきれずに二人はアパートの廊下^{ろうか}に倒れ込んだ。顔だけこちらに向けた彼は笑いながら口を開く。

「めまい……寝過ぎ」

手を貸さないわけにはいかなかった。ふらふらしている星野響に肩を貸して、彼の部屋の中に入る。

風がすつと耳の横を通った。白いカーテンが風を抱いて大きく翻^{ひるがえ}っている。大きな観葉植物の葉も揺れている。小鳥のオブジェが本棚のあちこちで囀^{さえず}っていた。聴こえない声で。

物は少ないが殺風景^{さつふうけい}ではなく、温かみのあるいい部屋であることは、ぼくにもわかった。

壁には無数の写真が貼^はられていた。風景や人、花やオブジェ……すべて彼が撮影したのだろう。ゆりさんの写真もあった。

風邪^{かぜ}? 熱は? 一応薬飲んでおいたら?

などという二人の会話がきれぎれに聞こえてくる。二人は小声で話をしていた。

「じゃあぼくはこれで……」

ぼくが退散しようとする、また瞬間移動したかのように、今度はぼくの横に彼女がいた。

「お騒がせしてしまつてすみません。お詫^わびにお茶を飲んでいってください」

「いやそんな……」

「響、この前のクッキーまだあるよね?」

「あるよ。食器棚の一番上見て」

「オッケー」

早くこの場から立ち去りたいぼくを引き止めて、電気ケトルにお水を入れているゆりさんが、

「座つててください」と笑った。

ゆり、という綺麗な響きの名前があまりにも彼女に似合っていたので、自然と心の中で下の名前で呼んでいた。ぼくにしてみれば、極めて珍しいことだ。

ぼくは彼女に返す言葉が見つからず、しかたなくローテーブルの前に腰をおろした。

星野響はベッドに横になって目を閉じている。そしてそのまま口笛を吹き始めた。聴いたことのないメロディだ。それにあわせてゆりさんも綺麗な口笛を吹いた。

二人の美しい口笛の音で室内が満たされる。二匹のカナリアが部屋にいるみたいに。

観葉植物をぼんやり見ていると、「ブーゲンビリアです」と口笛をやめたゆりさんが言った。

「引つ越し祝いにわたしがプレゼントしたんです」

ブーゲンビリアという、鮮やかな濃いピンクの花のような葉が印象的な植物は、部屋をとて

華やかに彩っている。それは、二人の幸せな関係を象徴しているようにぼくには見えた。

彼女は皿に黄色いペーパーナプキンを敷いて、その上に桜の形をしたクッキーを綺麗に並べてローテーブルに置く。それから、透明のお茶を出してくれた。底に何か沈んでいる。

「それは桜の花です。桜茶っていうんですよ」

塩漬^{しおづけ}けた桜の花を使っているらしい。だからほんのりしょっぱい味がするのか。

こんな洒落^{しやれ}たものを飲むのは初めてだった。とても上品なものを飲んでる気がする。もちろん、おいしい。

クッキーを齧^{かじ}ると、懐かしい味がした。

「それ、彼女の手作りなんです」

と星野響がゆりさんを見ながら言った。

道理で懐かしい味がするわけだ。母親が昔作ってくれたクッキーと同じ味がする。見た目はこ

ちらのほうがずっと洗練されているけれど。

若い女性が作ったお菓子を食べるのは生まれて初めてだったことを思い出して、噛みしめるようにして食べた。

そんなほくを見ながら、「お花見はしました?」とゆりさんが訊ねてきた。

ほくは首を横に振った。桜は見たが、お花見はしていない。一緒にお花見をする人がいない。

「じゃあ、しましょうよ」

ゆりさんはそう言うけど、既に近所の桜は咲き終わり、葉桜になっている。そんなほくの心の声が聞こえたかのように、彼女は微笑んだ。

「葉桜だっというじゃないですか。桜は桜です」

「桜は桜か。名言だね」

そう星野響が頷いた。

「いつにしましょうか?」

ゆりさんは卓上カレンダーを見て言う。

葉桜見物に行くことに決まってしまったのか?

「今夜は?」

ゆりさんが星野響に訊ねた。

「響の具合がいいなら」

「いいよ。今夜は今川さんも仕事ないですよね」

彼はほくのシフトをチェックしてるのか。

ほくの驚きをよそに、二人はどんな話を進めていく。

「何か食べ物、用意しないかね。何がいいかな」

そう言う星野響の顔色はいつの間にかよくなっている。なんだかとても楽しそうだ。

どうせなら恋人と二人きりで行けばいいのに。

こんなお邪魔虫がついていくのに、どうしてそんなふうに笑っていられるんだろう。

「ハンバーガー」

ゆりさんがびつと人差し指を天に向けて、にっこりしながらそう言うと、星野響は苦笑いを浮かべた。

「またそれ?」

やれやれといった表情で彼はほくに説明する。

「ゆりの得意料理なんです」

そうなんですか、とほくはもごもご小声で言った。

「まあ、外でも食べやすいし、ハンバーガーでいいか」

「何その言い方。わたしのハンバーガーは手作りだから貴重なんだよ」

ゆりさんは口をとがらせて星野響に異を唱え、それからほくに向かってにっこり笑ってみせた。赤面しそだったので慌ててほくは俯いた。

材料を買ってくると言ってゆりさんが部屋を出て行くと、部屋はしんと静まりかえる。

しばらくしてそつと星野響の様子を見たら、口をわずかに開いて寝息をたてていた。ぼくは何をするでもなく、そつと膝を抱えた。本棚の小鳥を見つめていると、さっきの二人の口笛が耳の奥で甦り、頭の中で流れ始めた。

2 きつねうどん

なんでここにいるんだろう。

大学にいる時、ふと気づくと自問自答している。

親が大学には行けと言ったので、文学部を選んだ。

本が好きで、他のことには興味がないから。

一応、司書資格がとれる大学を選んだ。それぐらいだろうか、大学に求めたものは。

だから、大学のどの講義もぼくには退屈で、無意味で、時間の無駄に思える。

でも欠席することはない。

昔からの癖のようなもので、出席だけはきちんとする。ノートも綺麗に全部とる。

お喋りしたり、スマートフォンをいじったりして授業をきちんと聞かない生徒は、大体後ろの席に陣取る。

だからぼくは、隣に誰もいない前のほうの席をいつも選んで座っている。

真面目に授業を聞き、ノートをとるぼくのこととは、後ろにいる不真面目な学生たちの目に当然留まることになる。

だからいつも、試験前になると、

「ノート、コピーさせてくれない？」

と彼らから頼まれる。

たいいてい数人でやってくるのだが、彼らだけでなく、おそらくぼくが知らない他の学生たちの間でも多くのノートはコピーされていることだろう。

高校までと違って、彼らの顔と名前が一致していて毎日教室で顔を合わせるわけではないから、ノートごと貸してしまえば、いつ帰ってくるかわかったものではない。

試験前に、一生懸命とった自分のノートが紛失するという悪夢だけは防がなくてはならなかった。

だから、ぼくのノートをコピーさせてくれと、大学に入ってから初めて頼まれた時、ぼくはコピー機まで彼らについて行って、終わるとすぐにノートを返してもらった。

コピーしている間、彼らは特にぼくに礼を言うでもなく、気を使って話しかけてくるでもなく、自分たちの内輪の会話が盛り上がりすぎて完全にぼくを無視していた。まったく一言も話しかけずに。そういう扱いをしてもいい人間、と彼らに判断を下されたのだろう。

これまでだっけとそうだったから、特別腹は立たなかった。ただ、ぼくにとってはなんの得もなく、無意味で、気まずく、時間の無駄だった。

きつとこの様子を目にした学生たちには、ぼくはばかみたいに見えたことだろう。加えて、彼らは急ぎもせずに、仲間たちとお喋りに夢中で、だからと時間を気にせずコピーした。

すぐそばで、彼らのコピーが終わるのをじっと待っているぼくのことなんて、微塵^{みじん}も気にかけていない様子だ。

腹は立たなくても、さすがにうんざりした。

こんなことはもうたくさんだ。

そう思ったぼくは、次の試験前には、試験範囲のノートのコピーを事前に自分でコピーして、クリップでまとめて用意しておいた。

そして、（おそらく）前と同じ学生たちが、

「ノート、コピーさせてくれない？」

と当然の権利みたいな顔つきで、へらへら笑いながら言ってくると、用意しておいたノートのコピーの束をリュックサックから取り出した。

「あなたのお名前を訊いてもいいですか？」

ぼくはノートをコピーさせてくれと言った男子学生に訊ねる。

「え？ あ……タガワだけど」

その男子学生は、ぼくの手に握られているコピーの束に目を奪われながらぼそつと答えた。タガワ。

「下の名前もいいですか？」

「ヨウジ。タガワヨウジ」

タガワヨウジ。

頭の中で繰り返す。

「これがノートのコピーです。返さなくていいですから、これを皆さんでコピーしてください」

彼のすぐ後ろでスマートフォン片手にお喋りしている男女たちをちらっと見ながら言うと、タガワヨウジは頷いた。

「あんがと。用意いいね。助かる」

彼はコピーの束を手にとると、もうぼくに用はないというように、さよならも言わずにさつさと連れの友達と立ち去った。

自分の名前を訊かれたら、普通はなぜ名前を訊かれたのか気になるだろう。でも、彼は理由を訊ねることなく、簡単に名前を教えてくれた。そしてぼくの名前は訊ねなかった。

とにかくノートが手に入ればそれでいいわけだ。

それに、別に名前なんてぼくに知られてもなんの害もないと、一瞬で判断したに違いない。

ぼくは彼らがいなくなると、メモ帳に、

『ノートのコピー↓フランス文学のタガワヨウジ』

と書いた。

フランス文学の講義で一緒のタガワヨウジにノートのコピーを渡したことが、これでいつでも

確認できる。

その翌週のフランス文学の授業が終わると、今度は別の学生がぼくのところに来て、「あのあのー、よかったら、ノート貸してくれませんかあ？」

と言ってきた。

声の主はえらく短いスカートを穿いた髪^はの長い女子学生だった。

ぼくはさつと講義室の後ろのほうを見まわして、ある場所を指差した。

そこにはタガワヨウジとその仲間たちがいた。

「あそこに、タガワヨウジという人がいるんで、その人からノートのコピーを受け取ってください」

そう、ぼくはその女子学生に言った。

「え……タガ……」

「タガワ、ヨウジ。ぼくのノートをコピーしたものを彼に渡したので、説明すれば伝わると思います」

女子学生は一瞬、きょんとした表情を浮かべた。

「……え、ああ、そうなんですね。わ……かりました。ありがとうございます」

彼女は面白いものでも見るような目つきでぼくの顔をじいっと見てから、にこつと八重^{やえ}歯^ばを見せて笑った。そして、小走りでタガワヨウジたちがいる方へ行った。

すぐに立ち去ろうと思ったけれど、やっぱり気になって、彼女がタガワヨウジに話しかけるのを見守った。

彼女がタガワヨウジに話しかけて、振り返ってぼくを指差した。

タガワヨウジは目を細めて、『は?』とでも言いたげな顔をした。

ぼくも、は? と思った。

まさか、もうぼくの顔を忘れたのか?

けれど、しばらくしてから、『ああ』というような表情をタガワヨウジは浮かべて、笑顔でべらべらと彼女と喋り始めた。

彼はちらちらと、短いスカートから伸びている彼女の足を見ていた。

和気藹々^{わきあいわ}とした雰囲気^{きふき}の彼らを見て、ノートのコピーは無事に彼女の手^てに渡るだろうと判断すると、ぼくはそつと講義室をあとにした。

これら一連の出来事は、フランス文学の講義に限って起こったことではない。

ぼくがとっている講義、全部のノートをぼくはコピーしておいた。

念のためだった。でもそれで正解だった。

ノートを貸してくれと頼んでくる学生が誰もいない講義もあれば、タガワヨウジや髪の長い女子学生たちみたいにノートを借りにくる学生がいる講義もあったからだ。

ぼくが用意したノートのコピーの三分の一は無駄になった。でも残りの三分の二は役に立ったということになる。

それがいいことなのか悪いことなのか、ぼくにはよくわからない。

原本になったコピー代に、と形だけでもお金を差し出そうとする人は一人もいなかったし、それは最初から期待していなかった。勝手にぼくがノートをコピーしたわけだから。

でも全講義のノートのコピー代はちょっとした出費になった。

すごい出費というほどではないけれど、ぼくにとってはなんの意味もない出費だから、虚しさは半端じゃない。

友達でもなんでもない、授業をろくに聞かずに、試験だけいい点をとろうとしている輩たち^{やから}のための出費。

虚しくならないはずがない。

「ごめん、貸せない」

本来なら、その一言ですむ話だ。

友達でもなんでもないんだから。

それに大学だから、いじめなんてものもないだろう。

でもぼくは、どんなに虚しくても、ノートを貸すという行為をやめることができない。

これまでずっと、試験前のノートの貸し借りだけで、同級生たちとつながってきたからかもしれない。

他にもノートをきちんとしていてる学生はいくらでもいる。

でも、そのなかから、彼らはぼくを選んで、ぼくのノートを貸して欲しいと思った。

ぼくがきちんとノートをとっている人間だと思ったから。

そして頼めば貸してくれる親切な人間だと思ったから。

そうやって、いいように思ってしまう自分がいる。

もちろん、現実はどうじゃないことはわかっている。

無欠席で、生真面目にノートをとっている人間の中で、一番ぼくがおとなしそうで、気が弱そう^{やから}で、ノートを貸してくれと頼めば断らないだろう。そうやって軽く見られているからこそ、彼らはぼくを選んだのだ。

ぼくはただ、一番甘く見られているだけに過ぎない。

「ノートなんて貸す必要ないだろ」

なんて、間に割って入ってくれる友達もいない。

そういうことを、全部みんなわかっていて、ぼくにノートを借りにくる。

わかってはいるけれど、ぼくは断らない。

「あ、この前はノート、ありがとでしたあ」

大学の学食にいる時だった。

フランス文学の講義で、ぼくにノートを借りに来た、髪の長い女の子が声をかけてきた。今日は短いスカートではなくロングスカートを穿いている。

「……いえ」

突然話しかけられて驚いたばかりは、こもった声でほそっとそう言って、彼女の視線を外すように体を斜めに向けた。

彼女ははきはきと元気のいい明るい声で、

「ほんと、たすかりましたよー。今度、お礼させてくださいね！」

なんてことを言ってから、くると踵を返して、パン類を売っている売店のほうへ無邪気な子供みたいに駆けていった。

その日の頃は、話しかけられる少し前まで、珍しく腹が減っていた。そういう時は売店で焼きそばパンと卵サンドと牛乳を買う。

焼きそばパンは別に好きなわけじゃない、焼きそばとパンは炭水化物同士で合わない我常常思っている。だが、腹にたまると、値段が安いから、空腹の時にはちょうどいい。卵サンドは卵を家ではあまり食べないので栄養面で選ぶようにしている。牛乳もそうだ。

でも、さっきの女の子がいる売店へ行くと、あとをつけてきたと誤解されそうだし、何よりもう食欲が失せていた。

お礼？

お礼ってなんだ。そんなものいらない。

昼食は胃に優しいような、うどんにすることにした。

こういう時に頼むのは、きつねうどんだ。

大きな正方形の甘じょっぱい油揚げがのっているうどん。

値段も安いし、言うことない。

きつねうどんを注文する時、ぼくの声が小さすぎて、調理のおばさんに二度も、「え？ もう一回はつきり言って！」と怒鳴られてしまった。

これもいつものことだ。

その時、おにぎりが目に入った。

おにぎりを一個追加するべきか、一瞬迷った。

今日はこのあと、図書館のアルバイトがある。うどんだけじゃもたないかもしれない。

でも、食欲が失せてしまっていたし、また小声で注文しておばさんに怒鳴られるのが嫌だったのでやめた。

幸運にも、窓際の席が空いていて、その周囲に騒がしそうな学生たちもいなかったで、きつねうどんのどんぶりをのせたトレイを持って足早に向かった。

飲み物は水筒タイプの魔法瓶に、今朝入れてきたほうじ茶がある。

時間がある時は、なるべく朝にほうじ茶を淹れるようにしている。時間がない時は水道水を水筒に入れることもあるけれど、これでも儉約しているつもりだ。

きつねうどんは味がなかった。

さっきの髪の毛の長い女の子が、どこからぼくを見ているような気がして、落ち着かなかったから。

ぼくは急いできつねうどんを食べ終えると、大学を後にし、アルバイト先の図書館に向かった。

「おつかれさまです」

眩くように言いながら、図書館スタッフの休憩室に入る。

テーブルの上にあるソフト表で、今日の最初の持ち場を確認した。

ぼくは時間ギリギリに持ち場に行くのが嫌だ。余裕をもって交代しないと、焦って最初からペースが狂う。

最初の持ち場は児童室だった。

ここは図書館で一番平和だ。

もちろん子供たちが走りまわったり、空気を入れたビニール人形にキックを見舞ったりして騒ぐことはあるけれど、クレーマーはいないし、貸出で行列になることもない。

その次のぼくの持ち場は視聴覚コーナーだった。

視聴覚コーナーのカウンターに向かうと星野響がいて、ドキッとした。

これから交代するのかと思ったら、既に交代したあとのようで、これからぼくと視聴覚コーナーを担当するようだった。

「おつかれさまです！」

ぼくに気づいて、元氣よく挨拶する彼。

「おつかれさまです……」

自分の声がどうして彼のように、ハキハキと元氣よく出てくれないのか、呪いたくなる。

彼は返却されたDVDを、盗難防止用の磁気つきの透明ボックスに手際よく入れていく。

ぼくも彼の隣に立つと、その作業に加わった。

珍しく視聴覚室には利用者が誰もいなかった。

いや、一人だけいた。

試聴コーナーでヘッドホンをしてCDを聴く、四十代ぐらいの女性だ。ノリノリで踊って、完全に自分の世界に入ってしまったっている。

貸出袋を手にした、また別の利用者がカウンターにやってくると、すかさず星野響が、「こちらへどうぞ」と笑顔で声をかける。

年配の女性が声に誘われるようにして星野響の前に立つ。

彼女はわざわざ自分で貸出袋から一枚のCDを取り出すと、それを星野響に渡した。ほとんどの人が貸出袋をカウンターに置くだけなので珍しい。

「中身を確認いたしますので少々お待ちください」

星野響がそう言うと、年配の女性は少し曇った表情を浮かべた。

「あのね。そのCD、聴いてると、途中でぶつぶつぶつて時々音が途切れたの。傷でもついているかしらね」

星野響はCDを取り出すと、銀色に光る面を凝視した。

「申し訳ありませんでした。こちらでチェックしておきます」

「お願いします」

「本当に申し訳ありませんでした」

星野響が深く頭を下げると、年配の女性は表情を明るくしてころろと笑う。

「あなたのせいじゃないから大丈夫よ。ふふ」

そう言っただけで彼女が立ち去ったから、星野響はCDを指差してほくに言った。

「研磨^{けんま}してもらったほうがいいですよ」

「そうですね……確認してもらってください」

「じゃ、カウンター、少しお願いします！」

「はい」

ほんとに彼は元気だな。

それにいつも笑顔。

たぶん彼は、誰にでも自然に笑顔を向けることができ、初対面の相手でもいい人だと信じていることができる、無視されるかもしれないなんて思いもしない。だから、自分から感じよく他人に話しかけることができる。

すごいよ。

全部、ほくにはできないことだ。

「あははははは」

そんなことを思っていると、奥の事務室から笑い声が響いてきた。

一瞬だけ。

本当は、そんなふうにスタッフが大声で笑ったりしてはいけない。

奥の事務室にはベテランの男性スタッフがいて、調子の悪いCDやDVDをチェックして、傷などがついていれば研磨して修復する。完全に壊れているものは処分して、蔵書データから削除する。

「ほしちゃん……」

そんな声が事務室から漏れ聞こえてきた。

ほしちゃん。

星野響のことだろう。

もう、ほしちゃんなんて呼ばれてるんだ。

ほくは今でもみんなから、「今川さん」か「今川君」としか呼ばれない。

しばらくして、手ぶらの星野響が笑顔で戻ってきた。

「遅くなってすみませんでした」

「いえ……」

なんの話で盛り上がったんだらう。

「研磨すれば大丈夫みたいです」

「そうですか……」

ヘッドホンでCDを試聴している女性は、まだノリノリで踊っている。

星野響はその女性が気になるようにじっと見始めた。

見るな。

なぜか、星野響が見たら、あの女性は見られていることに気づくような気がした。不安は的中し、女性は突然、踊りながらくるっと振り返った。

ほんとと星野響は同時にさっと手元に視線を落として、作業に没頭しているフリをする。

「もう大丈夫ですよ」

しばらくして、星野響がささやいた。

少しだけ顔をあげて、上目づかいで女性のほうを見ると、彼女は前よりもノリノリで体を動かして踊っている。見られていることを意識して余計に盛り上がっているかのように。

その時、何か聞こえた。

隣を見ると、俯いた星野響が肩を震わせるようにして笑いを噛み殺しながら、震える声で言った。

「楽しそうで、いい、ですよね」

楽しそうなのは彼女じゃなくて君だ、星野響。

彼は図書館ではやけに活き活きしている。

というか、本当に楽しそうだ。

桜茶を彼の家で飲んだ時のことを思い出す。

彼と連絡がとれなくて、取り乱して、ほかの部屋のドアを叩いていた恋人のゆりさん。

あの時の彼はなんだか、隣に今いる彼と違って、弱々しくて頼りなげで……なんだろう、よく

わからないけど、何かが違う。

まるで別人のようだと思った。

でも、人間には多面性がある。みんな、色々な顔を持っていて、相手によってその顔を使い分けている。

星野響の場合、ほかや図書館スタッフの前では明るくて社交的な好青年。

じゃあ、ゆりさんの前では？

って……そんなこと、ほかには――

「関係ない」

声に出してしまった。

「え？」

涙まで流して笑いをこらえている星野響は、目尻の涙を指先で拭いながら、無垢な瞳でほかの顔を覗きこんだ。

3 おにぎり たこ焼き

「おにぎり女」

掘りごたつの隣に座っているシムラが、ミドリという女性に向かってにやつきながらささや